



日本近代文学館展示ホール
明治・大正期の文芸誌、婦人誌が充実。
オリジナル便箋は「吾輩は猫である」初版挿絵から(右)



日 本近代文学館は明治以降の近代文学の資料収集・保存目的で1962年に文壇・学界・マスコミなどの賛同によって発足した。「明治時代の純文学の資料が充実しています。生原稿などの貴重な資料も豊富です。全国各地にある文学館の中心的存在として、指導・相談にも当たっています」と文芸評論家・同館の理事を務める桶谷秀昭名誉教授は語る。

また文学雑誌の収集・保存に力を入れており、入手困難な雑誌や名作の初版については複製版も作成している。

展示室では常設展に加え、春秋に2ヵ月ずつ企画展を実施。現在、秋の特別展示として11月30日(土)まで、高橋和巳文庫紹介「青春の文学」が公開中だ。閲覧室においては特別なものを除いて図書・雑誌・新聞や、特別資料と呼ばれる作家の直筆原稿や書簡・日記など一般公開している(閉架式)。

日本近代文学館

東京都目黒区駒場4-3-55(駒場公園内)
電話/03-3468-4181
休館日/日、月、第4木曜
展示ホール/観覧料200円(常設展100円)
閲覧室/1日300円
★京王井の頭線「駒場東大前」駅徒歩10分
★小田急線「東北沢」駅徒歩10分



桶谷秀昭名誉教授
日本近代文学館理事
文芸評論家

利用者には研究者や出版業界関係者が多く、毎年8月には資料の処理・保存に関する講習会を実施している。「文学を専門とする学芸員を養成することも視野にいれています」と同館学芸員の伊藤さん。講習会には毎年大学生、大学院生も多く参加しているという。

このほか現役作家による自作朗読会や、文豪の直筆原稿や書簡などの肉筆資料を読み、作品に対する理解を深めようという講座など、様々な催しが行われている。

名作文学の初版本の表紙や挿絵を絵葉書や便箋にしたものなど、オリジナルグッズも販売している。駒場公園内にはほかに旧前田侯爵邸や日本民芸館があり、周囲はちよっとした散歩コースになっている。



No.7

日本近代文学館
練馬区立美術館/
郷土資料室

第7回は桶谷秀昭名誉教授が理事を務める日本近代文学館と、小金井靖さんが勤務する練馬区教育委員会管轄の2つの施設(練馬区立美術館/郷土資料室)をご紹介します。

魅力のつまんだ宝の館がこんなに近くにこんなにいっぱい!



企画展では区在住のアーティストを取り上げることも多い

練馬区は人口、面積規模とも都内で上位に位置し、文化活動にも非常に力を注いでいる。

練馬区教育委員会が管轄する練馬区立美術館は、23区で数少ない区の直営美術館だ。閑静な住宅街にある同美術館は今年で開館17年目を迎えた。常設展の合同に年4回ほどオリジナルの企画展を開催しており、今年をはじめに行われた絵本絵画展はオープン以来最高の2万8000人余の入場者を記録した。遠方からのリピーターも多いという。現在12月8日(日)まで「奥田元末 絵画という熱情」展を開催中。

同じく、同区教育委員会が管轄する郷土資料室は昭和45年に開館した。地元密着型の博物館として、ひっそりとした佇まいながら、

練馬区郷土資料室

練馬区石神井台1-16-31
練馬区立石神井図書館地階
電話/03-3996-0563
休館日/月曜、第4金曜
開館/9:00~17:00
入場無料

練馬区立美術館

東京都練馬区貴井1-36-16
電話/03-3577-1821
休館日/月曜
開館/10:00~18:00
観覧料/常設展無料
特別展500円
(展示により異なる)
★西武池袋線「中村橋」駅徒歩3分



郷土資料室展示室
年季の入った木枠の展示箱には昔この地で使われていた民具や土器などが納められている。



小金井靖さん
練馬区教育委員会
生涯学習課文化財係
学芸員
(昭和50年史学科卒)
(昭和58年大学院
修士課程修了)

ら、年間1万6000人の来場者があるという。地元の小・中学生が大半だが、遠方からやってくる人も少なくない。「よくも悪くも開館当時のままなんです。多くの博物館が小綺麗に改装されていくなかで、逆に若い人には新鮮に映るみたいですね。23区おもしろ博物館」として取り上げられたこともあるんですよ」と同区教育委員会の学芸員であり、本学で非常勤講師を務める小金井靖さん。

練馬区は戦災の影響を比較的受けずに済んだが、近年の土地開発によって古くから住民に親しまれた建造物が消えつつある。そうした中、「博物館が、資料を保存するだけでなく、地域社会のためにどう役立てるかの仕組みづくりを整えたい」と語る小金井さん。白山キャンパスで受け持っている授業でも「そうしたことに関心を持つ生徒を育てていきたいですね」と力を込めて語った。